

不安の時代の「愛」を考える

Thinking about “Love” in an Age of Uncertainty

本多 俊貴

HONDA, Toshiki

現代社会は、災害・感染症・環境問題等のさまざまなリスクを抱えており、貧困の増加を含む、生活の足下が崩れる時代を迎えつつある。他方、人間の生き方やライフコースも多様化し、家族やコミュニティの社会関係は、動的に捉え直されている。そうした中、これまで「当たり前」とされてきた生活／生き方は揺らいでおり、不安にかられた人々が増すことで、助け合いや共同が見直されてもいた。

本企画では、「愛」を論題とし、不安の時代に人間を支える社会関係と、そこに生じた暴力および危機を議論する。その「愛」とは、思想的あるいは宗教学的に議論された対象ではなく、社会結合・自己の基礎にある関係の一つでありながらも、さまざまな言説空間で語られ、規範として社会的に押し付けられがちな関係を指している。ここには「自己愛」と「他者愛」の双方が存在する。

この点について、木野村樹里と菅原想の報告にもとづいた議論を行う。木野村報告では、社会的に語られる「愛」が、人のつながりや家族にいかなる影響を与えたのかについて、実証的な理解を深める。具体的には、児童虐待事件に注目し、親の子に対する「責任」として語られてきた「愛」について、その言説・論調の変遷と問題状況を考察する。ここでは、COVID-19の自粛下において、もともと増加傾向にあった児童虐待件数のさらなる増加がみられた点にも注目する。菅原報告では、「不安」を解消して「安心」を求める人々が、常識や道徳、あるいは強者への服従を通して、自己の確固たる「支え」を求める点について、「権威主義的性格」の理論研究にもとづいた考察を行う。ここでは、アドルノの反権威主義の思想にみる自己反省的まなざしと、外部に何らかの支えを必要とすることもない自己のあり方に触れつつ、フロムの「自己愛」を重視して、反権威主義の基礎を捉え直す。そのうえで、「共感」「自己責任」の概念にも考察を加える。

[ほんだ としき／拓殖大学他非常勤講師／社会学・農村社会学]